医事・文談　九百八十七

《正岡子規（36）の続き》その275

子規周辺の人びと（二十五）

平岸　三八

「吾輩は猫である」の中に、主人公の苦沙弥先生が、天然居士の墓銘を撰するところがある。「天然居士は空間を研究し、論語を読み、焼芋を食ひ、鼻汁を垂らす人である」と一気呵成に書き流すが、鼻汁は酷だ。焼芋も蛇足だと消して、ただ「天然居士は空間を研究し、論語を読む人である」の一句だけにしてしまう。これでは何だか簡單過ぎるようだなと考えていたが、面倒臭くなって、空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士、噫」と、意味不明な銘を書いて筆を擱いたところへ、美学者の迷亭が来て、天然居士というは何物かと尋ねる。「例の曾呂崎の事だ。卒業して大学院へ這入って空間論という題目で研究して居たが、余り勉強し過ぎて、腹膜炎で死んで仕舞った。曾呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」という。迷亭はその銘を読上げて、「成程是あいい。天然居士相当な所だ」などという。

米山が死亡したのは、明治30年5月29日で、漱石が任地の熊本でその死を知って、共通の友人・斎藤阿具に追悼の書簡を発したのは6月8日である。悲報は直ちに地方の友人にも報ぜられたことが分る。

漱石の「処女作追懐談」（明治41・9・15『文章世界』掲載）に、漱石が米山との対話によって、建築家から文学者に一生の方向を轉じたことが書かれている。『文章世界』の記者が、漱石の談話を筆記したもので、かなりの長文である。

余談だが、漱石は気むずかしい人のようだが、随分たくさんの談話筆記を残している。存外、気やすいところがあったのだろうか。明治39年8月28日附の高浜虚子宛の手紙の末尾に「来客紛として至る舌頭多忙を極む」とあるから、なかなかおしゃべりに忙しかったことが分る。『猫』を発表の頃である。

「追懐談」のなかの天然居士との関連部分を要約する。

十五、六歳の頃、漢書を読んで文学というものを面白く感じ、自分もやってみようという気がして、兄に話したところ、兄は文学は職業にはならん、たしなみ（アッコンプリッシメント）に過ぎないと云って、むしろ叱った。即ち飯の種にはならないと云われたのだ。漱石のこのときの文学というのは、漢文のことで、漱石の漢文の立派なことは、専門家の高島俊男氏が折紙をつけていることは前述した。

よく考えて見て、何か趣味を持った職業に従事してみたいし、それが世間に必要なものでなければならない。己を曲げず、趣味があり、世に有用で欠くべからざる仕事としては、医者があるが、医者は嫌いだ。どうか医者でなくて、何かいい仕事がありそうなものと考えて、ふと建築のことに思い当り、建築ならば衣食住の一つで、世の中になくて叶わぬばかりか、同時に立派な美術で、趣味があり、これにしようときめた。

丁度その頃（高等学校）の同級生に、米山保三郎という友人が居た。それが大変な変物で、常に宇宙がどうの、人生がどうのと大きなことばかりいう。

それが或る日訪ねてきて、例の如く色々哲学者の名前を聞かされた揚句、君は何になるのだと訪ねるから、今までの話をしたところ、彼は断乎として斥けてしまった。

今の日本でどんなに腕を揮ったって、セントポルズ大寺院のような建築を後世に残すことはできないじゃないかなど、盛んに大議論を吐いた。

それよりもまだ文学の方が生命があるという。自分の考えは喰べるということを基点としたものだが、米山の説は衣食などは問題にしていない。自分はこれに敬服し、何だか空々漠々としているが大きいことは大きい。成程そうかと、其晩、即席に自説を撤回して文学者になるときめた。呑気なものだ。

然し漢文科や国文科の方はやりたくないので、英文科を志望することに一決した。